

むすうじむら かず そんざい せかい 無数字村 一数の存在しない世界

だい しょう 第1章



「算数の宿題なんて、いやだなあ！」 いろいろな様子で、フランクは算数の教科書をバサッと閉じました。土曜日の今日は、今朝から勉強がはかどっています。あと数分で昼食という時、フランクはドサッとベッドに転がって、みじめな気分になっていました。

そして、フランクはとうとうと始めました…

「そうだ、あいつだ！」 後ろで、みにくい声がうなりました。

はっと気が付くと、フランクは、今までに見たこともない、変てこな服に身を包んだ、変わった出で立ちの男3人に囲まれていました。その服はまるで、寸法のことなど全く考えず、いい加減に切っただけの布をいっしょくたに束ねたかのようなでした。

「一体何なの？ おじさん達は、だれ？」と、フランクがたずねました。

ところが、男達は返事をしないどころか、フランクに荒々しくつかみかかり、両手をなわでしばり上げようとしてきました。

「放してよ！」 フランクは抵抗して必死にもがきましたが、とてもかないません。すぐに、両手は後ろでしばり付けられてしまいました。それも、今まで見たこともない、バカバカしいほど長いなわで。

「ここはどこなの！？ どういうことなの？」 フランクは自分をつかまえた人達にじつこく聞きました。

「お前を、無数字村に連れて行くんだ。お前にはこらしめが必要だから。よくまあ、そんなにたくさんのお金を身につけてわれわれとちき我々の土地に来たもんだ！」



お前にはこらしめが必要なんだ！



「散だっけ？」 フランクは聞き返しましたが、返事はありません。しばらくの間は、あきらめて付いて行くしかない、と、フランクは思いました。彼は後ろから荒々しく突き押されながら、小さな村のような場所に向かって、ほこりっぽい道を進んでいきました。

「何て変てこりんな場所なんだ！」と、フランクは思いました。道自体、何の理由もなく幅が広くなったりせまくなったりしていて、道を作った人は、全く正気ではなかったかのようです。必要もないのに道がくねくね曲がっていて、目的地に行くのに必要な実際の距離の2倍ほどもあるのです。

村に近くなると、道のわきには、貧弱な形をした小さな標識が、ものすごく高い柱のてっぺん近くにガガっています。あまりにも高いので、ほとんど字が読めないくらいでした。

「無数字村」と、標識には書かれていました。「人口：かなりたくさん。注意！ 我々の町の近辺での散の使用現行犯は法律により、厳重に処罰される。」

「何てバカバカしいんだ！」 思わず、フランクは口走りました。

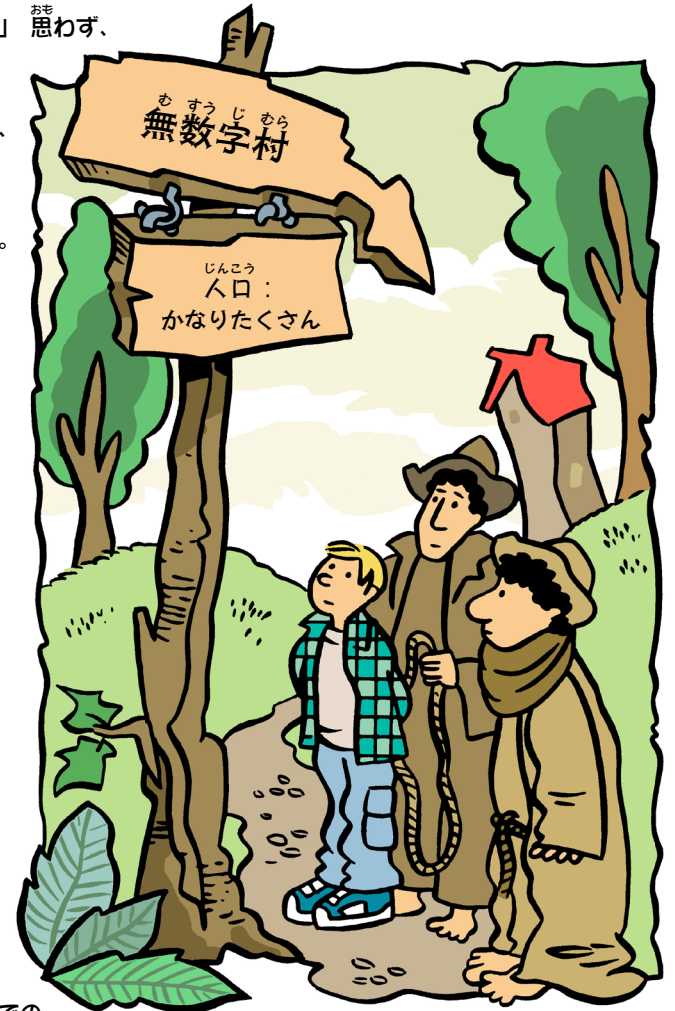
「バカバカしいかどうかは、裁判官に裁かれたら分かるさ。」と、3人の中で最も背の低い男が言い返しました。「我々には、お前を牢屋に入れるのに十分な証拠があるんだぞ！」

第2章

ふとフランクは、3人の男達が靴をはいていないことに気がきました。ズボンも、いい加減な長さで切ったなわで、ずり落ちないようにくられているだけです。それで、あることがはっきりしてきました。つまり、彼らは生活のあらゆる面で、散を使わないようにしているようだということです。

フランクの顔に、いたずらっぽい表情が浮かびました。もしフランクが、町に着くまでの歩数を、声を出して散え始めたら、一体どうなるだろう？ けれども、彼を見張っている男達の気性の荒々しさを考えて、それはやめることにしました。

無数字村は、全く数字の存在しない場所でした。巻尺さえ使われたことがないようです。きちんと測られたものは何一つなく、まっすぐなものもありません。それで、屋根は今にもくずれ落ちそうです。フランクは、これ以上傾いた家並みなど、想像さえできませんでした。壁も曲がっているし、ドアも全く合っていません。窓も、ちくはくで・・・と言うより、そもそも窓がほとんどないのです。均一なものや調和のとれたものが、一切ないようでした。





フランクは押されていって、中央市場を通りかかりましたが、それは今まで見たこともないような気遣い(きづかい)じみたものでした。物には値段(ぶねん)も付いてないし、お金のやり取り(やりとり)もありません。だけれども、何も散(ち)えないのです。ただ、変(へん)てこな物を気まぐれ(きまぐれ)に交換(こうかん)しているだけです。判断(はんぱん)の基準(きんじゅん)となるようなものも、全然(ぜんぜん)ありません。フランクが普段(ふだん)市場(いちば)で目(め)がけるような陳列欄(ちんれいらん)などありません。この市場(いちば)は完全(かんぜん)なる混乱(こんらん)でした。

市場(いちば)を過ぎ(す)ると、今度(こんど)は学校(がっこう)らしきものが見え(み)ました。平(たい)らな面(めん)に「学校(がっこう)」となく(なく)り書き(か)きされていた(いた)がらです。生徒(せいと)達(たち)には、決(き)まった教科書(きょうかしょ)もなく、本(ほん)のサイズも形(かたち)もバラバラ(ばらばら)でした。本(ほん)にはもちろん、ページ数(ぺいじず)も記(き)されてい(い)ません。無(む)数字(じ)字(じ)では、時計(とけい)やカレンダ(か)ーなど、時(じ)間(かん)を計(けい)るためのものも、完全(かんぜん)に禁(きん)止(し)されてい(い)るよう(よう)でした。学校(がっこう)は閑(かん)散(さん)としていて、ほとん(ほとん)どの生(せい)徒(と)は、一(いっ)体(たい)いつ授(じゆ)業(ぎやう)がある(あ)るのか(か)さえ分(わ)からず、実(じつ)際(さい)に登(とう)校(がっこう)した生(せい)徒(と)も、ほとん(ほとん)ど何(なに)も学(まな)んでい(い)ません(せ)でした。

ついにフランクと男(おとこ)達(たち)は、ものすごく苦(く)しいあばら家(や)に着(つ)きました。そこ(そこ)では何(なに)人(にん)か(か)の男(おとこ)達(たち)が、建(た)物の外(そと)にすわ(すわ)って待(まち)てい(い)ました。フランクも、「そこ(そこ)にすわ(すわ)って待(まち)て！」と命(めい)じられ(ら)れました。

「待(まち)つって、何(なに)を(なに)ですか(ですか)?」と、フランクはたずね(たずね)ました。

「裁判官(さいはんかん)に決(き)ま(ま)つてお(お)る！」



「だけれど、何(なん)時(じ)に來(き)るん(ん)ですか(ですか)?」とフランクが質(しつ)問(もん)すると、顔(かお)をびし(びし)やりとた(た)たか(か)れました。

「お前(まえ)の散(ち)のた(た)わ言(ご)や無(む)礼(れい)はもうた(た)くさん(さん)だ。これ(これ)以上(いじょう)『時(じ)間(かん)に(に)つ(つ)いての(の)話(わ)』を(を)す(す)ると、評(ひょう)さん(さん)ぞ。」

第(だい)3(しゅう)章(しょう)

困(こん)惑(わく)し、しよ(しよ)げ返(かえ)つたフランクは、ベンチ(ま)で待(まち)つてい(い)た老(ろう)人(じん)のとなりにすわ(すわ)りま(ま)した。そ(そ)して、や(や)つ(つ)と(と)の思(おも)いで勇(ゆう)気(き)をふ(ふ)りし(し)ほ(ほ)つ(つ)て、老(ろう)人(じん)に話(わ)し(し)が(が)け(け)ま(ま)した。「裁(さい)判(はん)官(かん)は(は)いつ(いつ)來(き)る(る)ん(ん)ですか(ですか)?」

「いつ(いつ)だ(だ)つ(つ)て?」老(ろう)人(じん)は落(お)ち着(ち)か(か)ない様(よう)子(す)で、い(い)が(が)し(し)げ(げ)に言(い)いま(いま)した。「ほ(ほ)う(う)や、時(じ)間(かん)に(に)つ(つ)いて話(わ)す(す)ん(ん)ぞ、お(お)そ(そ)ろ(ろ)しいこと(こと)じ(じ)ゃ! そんな(そんな)こと(こと)は、さ(さ)つ(つ)と(と)忘(わ)れ(れ)な(な)さい。そ(そ)う(う)で(で)ない(ない)と、裁(さい)判(はん)官(かん)の前(まえ)で(で)は決(き)して助(たす)か(か)ら(ら)ん(ん)ぞ。」

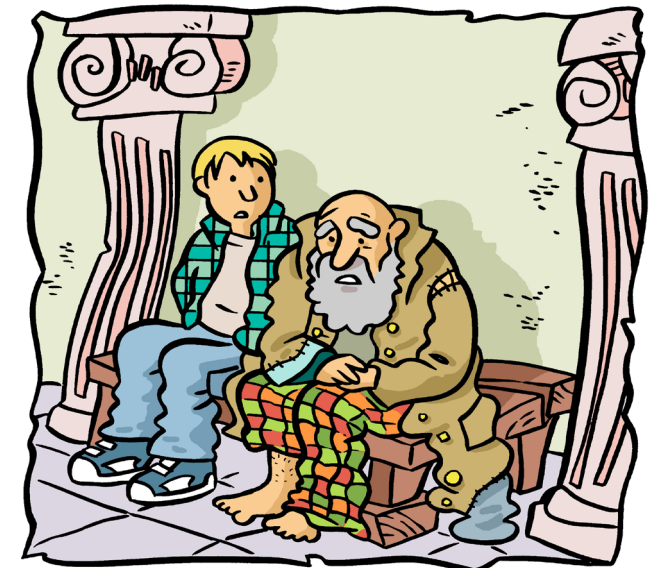
フランクは長(なが)い(い)こと(こと)、じ(じ)つ(つ)と(と)す(す)わ(わ)つ(つ)てい(い)ま(ま)した(た)が、つ(つ)い(い)に(に)が(が)ま(ま)ん(ん)で(で)き(き)な(な)く(く)な(な)り、あ(あ)え(え)て(て)ま(ま)た(た)質(しつ)問(もん)し(し)ま(ま)した。「裁(さい)判(はん)官(かん)は(は)今(いま)日(にち)來(き)る(る)ん(ん)ですか(ですか)?」

「いつ(いつ)來(き)る(る)か(か)は、だ(だ)れ(れ)も(も)知(し)ら(ら)ん(ん)。『いつ(いつ)』とい(い)う(う)のは(は)時(じ)間(かん)の表(ひょう)現(げん)で、こ(こ)こ(こ)で(で)は使(つか)う(う)の(の)を(を)許(ゆる)さ(さ)れて(れ)お(お)ら(ら)ん(ん)の(の)じ(じ)ゃ。」小(こ)声(こゑ)で老(ろう)人(じん)はさ(さ)さ(さ)や(や)き(き)ま(ま)した(た)。

午(ご)後(ご)の時(じ)間(かん)がゆ(ゆ)つ(つ)く(く)り(り)と(と)過(か)ぎ(ぎ)て(て)い(い)き(き)ま(ま)した(た)。急(きゅう)に、フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)の回(まわ)りにい(い)た人(ひと)達(たち)がみ(み)ん(ん)な、立(た)ち上(あ)がり(が)り(り)ま(ま)した(た)。裁(さい)判(はん)官(かん)がや(や)つ(つ)て來(き)た(た)の(の)です。最(さい)高(こう)にお(お)が(が)し(し)な(な)出(い)で(で)立(た)ちの老(ろう)人(じん)が、尋(む)問(もん)室(しつ)へ向(む)か(か)つ(つ)て(て)き(き)ま(ま)す。普(ふ)段(だん)は決(き)して答(こた)を(を)現(あら)わ(わ)ない、こ(こ)の(の)明(あ)ら(ら)か(か)に重(あ)き人物(じんぶつ)と見(み)える老(ろう)人(じん)が、フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)が村(むら)に現(あら)わ(わ)れた(れ)こと(こと)を(を)耳(みみ)に(に)して、や(や)つ(つ)て(て)來(き)た(た)の(の)です。

「反(はん)抗(かう)者(しや)よ、立(た)て(て)!」男(おとこ)の1(ひと)人(にん)がフ(フ)ラン(ラン)ク(ク)に向(む)か(か)つ(つ)てど(ど)なり(なり)ま(ま)した。「今(いま)か(か)ら(ら)お(お)前(まえ)の(の)判(はん)決(けつ)が(が)出(い)る(る)ん(ん)だ(だ)!」フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)はあ(あ)ら(ら)々(々)しくド(ド)ア(ア)ーそ(そ)れ(れ)を(を)ド(ド)ア(ア)と(と)呼(よ)べる(べる)なら(ら)の(の)話(わ)です(す)がーの(の)方(ほう)に突(つ)き押(お)され(ら)れ(れ)ま(ま)した(た)。フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)は他(ほか)の(の)「散(ち)の(の)」犯(はん)罪(ざい)者(しや)た(た)ち(ち)と(と)共(とも)に、よ(よ)る(る)め(め)き(き)な(な)が(が)ら(ら)法(はう)廷(てい)に(に)入(はい)つ(つ)て(て)い(い)き(き)ま(ま)した(た)。

最(さい)初(しょ)に尋(む)問(もん)され(ら)れた(れ)のは(は)フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)で(で)は(は)あ(あ)り(り)ま(ま)せ(せ)ん(ん)で(で)した(た)。他(ほか)の(の)人(ひと)達(たち)が裁(さい)判(はん)官(かん)の前(まえ)で尋(む)問(もん)され(ら)れ、判(はん)決(けつ)を(を)言(い)い渡(わた)され(ら)れる(る)様(よう)子(す)を、フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)はシ(し)ョ(ョ)ック(ック)を(を)受(う)け(け)な(な)が(が)ら(ら)見(み)て(て)い(い)ま(ま)した(た)。フ(フ)ラン(ラン)ク(ク)の(の)とな(とな)り(り)にす(す)わ(わ)つ(つ)て(て)い(い)た(た)老(ろう)人(じん)は、寝(ね)言(ご)で散(ち)を(を)散(ち)え(え)て(て)い(い)る(る)の(の)を(を)聞(き)か(か)れた(れ)た(た)罪(つみ)で、お(お)し(し)り(り)を(を)い(い)や(や)とい(い)う(う)ほ(ほ)ど(ど)た(た)た(た)か(か)れ(れ)ま(ま)した(た)。





最後に、フランクが尋問される番になりました。彼の罪状は、最高に重々しい調子で読まれました。それは、数の真端教義で住民を墮落させようとしたというもので、「無期懲役」に値する重罪でした！もちろん、懲役期間を決めることさえ、完全なる違反です。それに、時計やカレンダーもないので、町の住民はだれも、時間はおろが、今が何月何日かさえ知らないようです。

フランクは、自分が算数や数と関わるのがどんなに嫌いかについて、熱弁をふるって立派に自己弁護しましたが、全く無駄でした。検察官長がフランクに、サイズが印刷された自分のシャツのラベルを裁判官に見せるように強いた時点で、彼の答弁はすべて寸断されてしまいました。フランクには有罪判決が言い渡されました。

だい しょう 第4章

フランクはふるえおのきなながら、判決が下されるのを聞きました。おそれていた通りでした。無期懲役です！フランクが連れて行かれようとした時、裁判官が看守らに向かって叫びました。「それらのいまわしい仕立ての服と靴を、直ちに処分せよ。それらは法廷への不面目じゃ！」



不幸にも、フランクは、またもや襲われてしまいました！今度は、彼の服を引き裂こうと、暴行者たちがつめ寄りてきたのです。このいまわしい犯罪人に罰を下すのに手を貸そうと決意している、荒れくるった見物人の群れによって、彼のシャツはあっという間にポロポロに引き裂かれてしまいました。そして、ズボンが引き裂かれそうになると、フランクは必死に抵抗しました。・・・

1... 2... 3...

「フランク！ フランク！ 起きて！ お昼の時間よ。」

ほうっとしながら、まだ手足をバタバタしているフランクは、目を覚ますと、自分が自分の部屋にいることに気がきました。

「もどって来たぞ！ 全部、悪い夢だったんだ！」 喜びのあまり、フランクは声を上げました。

そうです、フランクはもどっていました！ 数の存在する世界、目日や時間、サイズや重さや高さやかさのある世界、レシビヤ計量のある世界に、もどっていました。正確な図形や、順序のある建物、算数が学校の教科として教えられている世界へ、もどってきたのです。

フランクは、自分が放り投げた算数の教科書を拾い上げました。「分かったよ。つまり、結局のところ、算数はそれほど悪くないってことだね！」

お
終
わり